

目次

第11講	第10講	第9講	第8講	第7講	第6講	第5講	第4講	第3講	第2講	第1講
物語(1)	隨筆(3)	隨筆(2)	隨筆(1)	日記(2)	日記(1)	評論(2)	評論(1)	説話(3)	説話(2)	説話(1)
.....
62	56	50	44	38	32	26	20	14	8	2

付録—文語文法要覽	第20講	第19講	第18講	第17講	第16講	第15講	第14講	第13講	第12講
.....	漢詩	史書	思想	故事・逸話	歌物語(2)	歌物語(1)	物語(4)	物語(3)	物語(2)
.....
122	116	110	104	98	92	86	80	74	68

第1講

説話(1)

宇治拾遺物語

まず用言の活用を確認しよう(1)

基礎学習

例題演習

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

これも今は昔、ある僧、人のもとへ行きけり。酒などすすめけるに、氷魚初めて出で来たりければ、

あるじ珍しく思ひて、もてなしけり。あるじ、用の事ありて、内へ入りて、また出でたりけるに、この

氷魚の、ことのほかに、^①少なく成りたりければ、あるじ、いかにと思へども、いふべきやうもなかりけ

れば、物語し、居たりけるほどに、^Aこの僧の鼻より氷魚の、一つ、ふと出でたりければ、あるじ、あや

しう覚えて、「その鼻より氷魚の出でたるは、^③いかなる事にか」と言ひければ、取りもあへず、「この頃

の氷魚は、目鼻より降り候ふなるぞ」と言ひたりければ、人、皆、はと笑ひけり。

(注) 氷魚⇨白魚に似た二、三センチほどの魚。鮎の稚魚。

問一 傍線部a～eの動詞について、(例)にならって、その活用の種類とここでの活用形を答えよ。

(例1) 力行四段活用・連用形

問二 二重傍線部①～③の形容詞・形容動詞について、(例)にならって、その品詞と活用形を答えよ。

(例2) 形容動詞・連用形

問三 傍線部A「この僧の鼻より氷魚の、一つ、ふと出でたりければ」について、

(1) その理由を「この僧」はどのように説明しているか、簡潔に答えよ。

重要古語

もてなす⇨ごちそうする。

物語す⇨世間話をする。

あやし⇨奇妙だ。変だ。

取りもあへず⇨すかさず。即座に。

候ふなるぞ⇨「候ふ」は丁寧語。「なる」は、

〈伝聞・推定〉の助動詞。

(2) 実際は、なぜ傍線部Aのような状態になったと考えられるか、簡潔に答えよ。

1 解法のポイント

問一 動詞の活用の種類の見分け方

古文の動詞の活用は、九種類あり、それぞれ次のように活用します。まずこの活用表を暗記しましょう。

活用の種類	例語	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
四段活用	書く	a	i	u	u	e	e
上一段活用	着る	i	i	いる	いる	いれ	iよ
下一段活用	蹴る	e	e	える	える	えれ	eよ
上二段活用	起く	i	i	u	u	うれ	iよ
下二段活用	受く	e	e	u	u	うれ	eよ
力行変格活用	来 ^く	こ	き	く	くる	くれ	こ(こよ)
ナ行変格活用	為 ^ず	せ	し	す	する	すれ	せよ
ラ行変格活用	死ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
ラ行変格活用	あり	ら	り	り	る	れ	れ

次に、動詞の活用の種類を見分けるためには、四種類の変格活用と上一段、下一段活用に所属する動詞をすべて覚えてしまわねばなりません。これらの動詞は数が少ないですから、比較的簡単に暗記できます。

上一段活用 「着る・似る・煮る・干る・見る・射る・鑄る・居る・率る」など(主要なもの十数語)

下一段活用 「蹴る」(一語)

力行変格活用 「来」(一語)

ナ行変格活用 「為・おはす」(二語)

ナ行変格活用 「死ぬ・往ぬ」(二語)

ラ行変格活用 「あり・居り・侍り・いますがり」(四語)

b「出で来」とd「居」は、右にあげた中に入っていますが、a・c・eは入っていません。入っていないということは、四段・上一段・下二段のいずれかの活用をするはずですが、

四段・上一段・下二段は、「ず」の付いた形を考えると見分けます。「ず」という助動詞は、必ず未然形に接続しますから、「ず」の付いた形とは未然形なのです。従って、

↓四段・上一段・下一段・上二段・下二段

は、母音のみ記されているが、これに、何行で活用する動詞かを考えて子音を付ければ活用が出てくる。例えば、「書く」なら、力行四段活用だから、力行の子音kを母音の前に付けて、

書か(k a)・書き(k i)・書く(k u)・書く(k u)・書け(k e)・書け(k e)となる。

↓上一段活用は、上記の九語以外にも十数語あるが、よく出てくるのは、上記の九語とその複合動詞(「見る」の上に「こころ」や「かへり」の付いた「こころみる」「かへりみる」)、「率る」の上に「もち」「ひき」が付いた「用ゐる」「率ゐる」などで、とりあえず上記の九語を覚えておこう。

↓bの「出で来」は、「出づ」と「来」からできた複合動詞。

↓ a ず ↓ 四段活用
 ↓ i ず ↓ 上二段活用
 ↓ e ず ↓ 下二段活用

のように見分けることができます。

問二 形容詞・形容動詞の活用

形容詞と形容動詞の活用は、二種類ずつしかなく、比較的簡単に覚えられます。

形容詞

活用の種類	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	
ク活用	く	く	し	き	けれ	○	基本活用
シク活用	しから	しかり	○	しかる	○	しかれ	補助活用
	し	し	し	し	し	し	基本活用
	から	かり	○	かる	○	かれ	補助活用
	し	し	○	し	し	○	基本活用
	し	し	○	し	し	○	補助活用

形容動詞

活用の種類	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ナリ活用	なら	なり	なり	なる	なれ	(なれ)
タリ活用	(たら)	とたり	たり	たる	(たれ)	(たれ)

問三 文脈を読み取る

(1) まず、「この僧」の言葉を探しましょう。問題文中で会話文は二つありますが、最初の「その鼻より水魚の出でたるは……」は、「あるじ、あやしう覚えて」とあることから、「あるじ」の言葉です。従って、「この頃の氷魚は、目鼻より降り候ふなるぞ」が「この僧」の言葉です。それがわかったら、あとは、解釈するだけです。

(2) (1)で解釈した「この僧」の言葉を聞いて、人々が笑っているところをみると、「この僧」の言葉は事実

↓基本活用には、助動詞が接続しにくいという欠点があったため、それをカバーする意味で「くく」「しくしく」に「あり」を付けてできたのが補助活用。従って、補助活用は、主に助動詞を接続させる時に用いる。

ではないようです。では、なぜ「この僧の鼻より水魚の、一つ、ふと出でたり」ということになったのでしょうか。傍線部Aの少し前に、「あるじ」が用事があって家の奥に入った時に、水魚が「ことのほかに少なく成り」とあります。このことから、「この僧」は、「あるじ」のいない間に、水魚を食べていたのだと考えられます。それも、慌てて大量に。それで、鼻から一匹出てきたということなのでしょう。

当時、僧は表向きは魚や肉を食べることを禁じられていました。他の説話などを読むと魚ばかりを食べる高德の僧の話もあるので、決して厳禁ではなかったのでしょうか、感心できるようなことではなかったのでしょうか。しかも、大量に食べるということになると、僧としては、恥ずかしいことだったと考えられます。それで、「あるじ」のいない隙に慌てて食べて、大失敗したというわけです。

この話のように「宇治拾遺物語」には、庶民的な滑稽話が多く収められています。

2 出典紹介

「宇治拾遺物語」は、鎌倉時代初期成立の説話集です。編者は未詳。仏教説話も含まれますが、庶民的な発想の滑稽な話も多く収められています。「利仁芋粥の事」「鼻長き僧の事」「絵仏師良秀家の焼くるを見て喜ぶ事」などが芥川龍之介によって小説化され、有名です。

3 説話文学のしるし

説話文学とは、神話・伝説・昔話・世間話・仏教話など、伝承されてきた説話を主な素材として作られた文学のことを言います。説話集とは、それらの説話文学を集めた作品です。最初の説話集は、平安時代初期に成立した「日本霊異記」とされていますが、鎌倉時代に最も数多く編集されました。次に代表的な作品をあげておきます。

平安時代	鎌倉時代
「日本霊異記」	「宇治拾遺物語」
「今昔物語集」	「発心集」
	「十訓抄」
	「古今著聞集」
	「沙石集」

↓ 仏教には「不殺生戒」という戒律があり、生きものを殺してはいけないとされている。しかも、現世のことに執着することは罪深いとされているので、いくら好物だからとはいえ、現世の食物に執着心を持って、むさぼり食うのは、僧として恥ずかしいことなのである。

↓ これらのうち「発心集」は、「方丈記」で有名な鴨長明の著作と言われている。

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

これも今は昔、比叡ひゑの山やまに児こありけり。僧そうたち、宵よのつれづれ①に、「いぎ、搔餅かいてもちひせん」と言ひけるを、この児、心寄せ②に聞きけり。さりとして、し出いださんを待ちて寝ねざらんも、悪わるかりなんと思ひて、片方かたがたに寄りて、寝ねたるよしにて、出いで来るを待ちけるに、すでにし出いだしたるさまにて、ひしめあきあひたり。

この児、さだめておどろかさんずらんと待ち居ゐたるに、僧そうの、「もの申し候まうらはん。おどろかせ給たまへ」と言ふを、うれしとは思へども、ただ一度にいらへんも、待ちけるかともぞ思ふとて、今一声呼ばれていらへんと、念ねんじて寝ねたるほどに、「や、な起こし奉たてまつりそ。幼わかき人は寝入り給ひにけり」と言ふ声のしければ、あなわびしと思ひて、今一度起こせかすと、思ひ寝に聞けば、ひしひしとただ食たひに食たふ音ねのしければ、術ずちなくて、無む期ごの後に、「えい」といらへたりければ、僧そうたち笑わらふことかぎりなし。

(注) 比叡の山 比叡山延暦寺。

児 社寺などで召し使われた少年。

搔餅せん ぼた餅を作ろう。

悪かりなん 良くないだろう。

おどろかさんずらん 起こしてくれらるだろう。

もの申し候はん 申しもし。

ひしひしと むしゃむしゃと。

無期の後 しばらく経って。

えい 返事する語。「はい」に当たる。

重要古語

おどろかさ 起こす。

いらふ 返事する。

もぞ するといけない。悪い事

態を心配するときを使う。

念ず 我慢する。

な……そ……してはいけない。

わびし づらい。やりきれない。

術なし どうしようもない。

問一 傍線部 a～e の動詞について、(例) にならって、活用表を完成させ、その活用の種類とここでの活用形を答えよ。

	例	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の種類	活用形
e		聞	か	き	く	く	け	け	カ行 四段 活用	連用形
d									行 活用	
c									行 活用	
b									行 活用	
a									行 活用	

問二 二重傍線部 ①・② の形容詞・形容動詞について、活用表を完成させ、ここでの活用形を答えよ。

	①	②	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用形
	つれづれ	わろ		○		○	○	○	○	

問三 傍線部 A「笑ふことかぎりなし」とあるが、僧たちはなぜ笑ったと考えられるか、簡潔に説明せよ。

POINT

問一 a と e は、いずれも助動詞「たり」が接続しているため、同じ活用形と考えられる。b に付いている「んず(むず)」と、c に付いている「ん(む)」も、同じ活用形に接続する助動詞である。